出雲方言における「一段動詞のラ行五段化」に関する覚書

小西　いずみ

1.　はじめに

日本語の地域方言で多元的に起こっている文法変化の代表的なものに，いわゆる「一段動詞のラ行五段化」がある。出雲方言においても，例えば「見る」の否定形がミラン，命令形がミレとなるなど，この変化が進んでいることが『方言文法全国地図』(国立国語研究所 1991；GAJ）で確認でき，複数の出雲方言概説書もこのことに触れている。出雲方言におけるこの変化についての詳細な研究はないようだが，GAJ を含む既存のデータや記述を対照すると，次のことが見えてくる。

(i) 出雲方言における一段動詞のラ行五段化は，否定・命令・使役・意志形と，とりたて否定形[1]とで，地理的分布が大きく異なる。

(ii) 否定・命令・使役・意志形のラ行五段化は，出雲北西部（出雲市など宍道湖西部域）にさかんで，東部・南部ではあまり起こっていない。

(iii) とりたて否定形のラ行五段化は，上とは異なり，出雲東南部でも起こっている。

上のような地理的分布のありかたから，否定・命令・使役・意志形と，とりたて否定形とでは，異なる成立過程を経たと推察される。本稿では，先行研究の記述・報告や筆者自身の臨地調査データをもとに，出雲地方におけるラ行五段化の様相，および，そこから推察される成立過程について，今後の調査・研究のための「覚書」として記しておく。

2.　言語変化としての「一段動詞のラ行五段化」の特質

先に，「一段動詞のラ行五段化」とはどのような言語変化なのかという点について，先行研究をふまえ，筆者の考えを述べておく。

上で述べたように，一段動詞のラ行五段化は複数の地域で多元的に起こっているが，それは，この変化が，言語体系の合理化という一般性の高い動機にもとづくことによる。この場合の合理性は，活用体系の単純化，特に，五段動詞（子音語幹動詞）と一段動詞（母音語幹動詞）の活用形の対応の単純化，ということにある。仮に現代共通語を初期状態とすると，基本形（終止・連体形）や仮定形や受身形では，kak- {u, eba, areru}：mi-{ru, reba, rareru} のように，五段［-V…］：一段［-rV…］という対応関係があるが，それを一般則化し，他の活用形にも適用させて新しい形を生じさせたとき，「一段動詞のラ行五段化」が起こったことになる[2]。形態論上の体系変化によく観察される「類推による平準化」(analogical leveling) の典型的な事例である。対応則の適用はまず一部の活用形・動詞におき，活用形間の平準化と語彙的拡散が進み続けると，ラ行五段化が完了する。つまり一段動詞がラ行五段動詞に統合される。下に，現代共通語を初期状態（段階 0）としたラ行五段化過程のモデルを示す[3]。五段を「書く」「蹴る」，一段を「見る」で代表させ，平準化の過程を 3 段階に分けた。最終局面で，一段動詞の語尾の頭音 r が語幹末尾音として再分析され，タ形でもラ行五段動詞と同様の音便規則を適用，ラ行五段化が完了する，とここでは考えている。

五段「書く」	「蹴る」	一段「見る」 段階 0		段階 1		段階 2 ー語幹再分析→	段階 3
kak-u	ker-u	mi-ru		mi-ru		mi-ru	mir-u
kak-eba	ker-eba	mi-reba		mi-reba		mi-reba	mir-eba
kak-areru	ker-areru	mi-rareru		mi-rareru		mi-rareru	mir-areru
kak-e	ker-e	mi-ro	→	mi-re		mi-re	mir-e
kak-oo	ker-oo	mi-joo	→	mi-roo		mi-roo	mir-oo
kak-aseru	ker-aseru	mi-saseru	→	mi-raseru		mi-raseru	mir-aseru
kak-anai	ker-anai	mi-nai		mi-nai	→	mi-ranai	mir-anai
kak-imasu	ker-imasu	mi-masu		mi-masu	→	mi-rimasu	mir-imasu
kai-ta	keQ-ta	mi-ta		mi-ta		mi-ta →	miQ-ta

なお，小林(2004:第3部第4章)は，GAJの準備調査・本調査データから，ラ行五段化進行の全国的傾向として，「使役形＞意志形≒命令形＞否定形＞過去形」という活用形間の序列があるとする(p. 583)。上のモデルはこれに沿うものになっている。

ラ行五段化の日本語史上の位置づけについては，小林(同)や松丸(同)が明確にしている[4]。松丸は，次のように簡潔にまとめている。

> 五段化は活用体系の単純化という，日本語が長い時間をかけておこしてきた変化の一環である。古典語では九つあった活用の種類が，現代標準語では五段・上一段・下一段・カ変・サ変の五つになっているが，五段化はそのうち上下一段動詞の活用を五段活用に近づけ，活用の種類を三つにしてしまおうとする変化である。つまり方言では標準語の一歩先を行く変化が起こっているわけである。(松丸 2006:41-42)

また，小林(同)は，一段動詞のラ行五段化について，「全体としては「逆周圏論」的な解釈をとりながらも，各地のレベルでは「周圏論」的解釈も必要である，という二重構造的なとらえかたがより適切」だとする（p. 582)。「逆周圏論」とは，ラ行五段化形はいわゆる「周圏分布」を示すが，古い状態の反映ではなく，各地で多元的に発生したものだという考えで，本稿はこれを前提としている。さらに小林は，ラ行五段化傾向が各地で「それぞれいくつかの核となる地域を中心として，徐々に発達したもの」とみている（＝各地のレベルでの「周圏論」的解釈)。

小林（同）は，ラ行五段化の発生に関与する言語内的な条件や，その進行の遅速に関与する活用形以外の言語内的要因についても言及している。しかし，松丸(同)が述べるように，個々の地域でのこの現象の発生と進行過程については課題も多い[5]。地域ごとに成立動機や進行過程を検証することによって，この変化の一般性と個別性が明らかになるであろう。本稿では，こうした課題意識に立ったうえで，出雲地方での一段動詞のラ行五段化の成立動機・進行過程について考察を行う。

3. 出雲方言の動詞活用に関する記述・調査報告の対照

出雲方言の動詞活用についての記述や調査報告から，本稿の課題に関わるものを示し，整理・対照する。図1に出雲地方の旧郡市町村（平成の合併以前）とGAJの調査地点を示す。

3.1 『方言文法全国地図』

まず，GAJ準備調査・本調査の結果データを整理する[6]。調査地点を下に示す。「P1」「①」などの地点番号は私に付した。

準備調査(1977年)　[P1]出雲市塩冶町,[P2]八束郡宍道町(現.松江市宍道町)大字西来待,[P3]仁多郡横田町(現.奥出雲町)大字小馬木字川東

本調査(1980-82年)　①簸川郡佐田町(現.出雲市佐田町)大字反辺小字水呑,②平田市口宇賀町,③松江市幸町,④大原郡木次町(現.雲南市木次町)大字西日登字芦原,⑤能義郡広瀬町(現.安来市広瀬町)広瀬,⑥仁多郡横田町(現.奥出雲町)大字横田字角

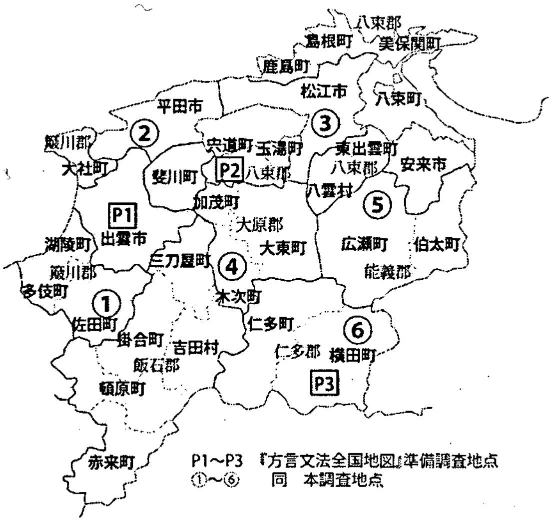


図1.　出雲地方の旧市郡町村

表1.　GAJ準備調査結果

		終止	連体	否定	使役	受身	意志	命令	仮定	取立否定	連用	過去
P1 出雲市	書く	カク	カク	カカン	カカシェー	カカレー	カカ	カケ	(マチャ)	カキャシェン カカシェン	カキダスィ カキハズィメ	カエタ
	死ぬ	スィノ	スィノ	(欠)	(欠)	(欠)	(欠)	(欠)	スィニャ	(欠)	(欠)	スィンダ
	見る	ミー	ミー	ミン **ミラン**	ミサシェー **ミラシェー**	ミラレー ミラエー	ミョ	ミー **ミレ**	ミャー ミリャ ミラ	ミャーシェン ミャシェン **ミリャーシェン** **ミラシェン**	ミダスィ ミハズィメー	ミタ
	来る	クー	クー	コン **コラン**	コサシェー **コラシェー** キサシェー **キラシェー**	キラレー キラエー	コー コ	コエ	クリャ クラ	キャーシェン キャシェン	キダスィ キハズィメ	キタ
	する	スィー	スィー	シェン	サシェー	サレー サエー	ショ サ	シェー シェ	シャ	シャーシェン	スィダスィ スィハズィメ	スイタ
P2 宍道町	書く	カク	カク	カカン	カカセー	カカレル	カクゾ	カケ	(マタ)	(イカシェン)	カキハジメー	カイタ
	死ぬ	シヌ	シン	(欠)	(欠)	(欠)	(欠)	(欠)	シナ	(欠)	(欠)	シンダ
	見る	ミル	ミー	ミン	ミサセー	ミライ	ミーゾ	ミー	ミラ	ミーシェン	ミハジメー	ミタ
	来る	クル	クー	コン	コサセー	コライ	クーゾ	コイ	コラ	クーセン	キハジメー	キタ
	する	スル	スー	シェン	サセー	サイ	スーゾ	セー	スラ	(欠)	シハジメー	シタ
P3 横田町	書く	カク	カク	カカン	カカシェー	カカレー	カカー	カケ	(マチャー)	カキャーシェン	カキダエタ カキハズィメ	カエタ
	死ぬ	スィノー	スィノー	(欠)	(欠)	(欠)	(欠)	(欠)	スィニャー スィノリャ	(欠)	(欠)	スィンダ
	見る	ミャー ミー	ミャー ミー	ミン	ミサシェー ミサシャー	ミラレー ミラリャ	ミョー	ミー	ミャー ミリャー	ミャーシェン	ミダエタ ミハズィメー	ミタ
	来る	クヮー	クヮー クー	コン	キサシェー キサシャー	キラレー キラリャ	コー	コエ	キャー クリャー	キャーシェン	キダエタ キハズィメー	キタ
	する	サー スー	サー スィー	シェン	サシェー サシャー	サレー サリャー	ショー	シェー	シャー スィリャー	シャーシェン	スィダエタ スィハズメー	スィタ

連体　「死ぬ鳥」以外は「～人」
否定　否定項目の回答であっても,「～ワセン」由来の形は取立否定の欄に記す。
仮定　五段動詞の調査項目は「待てば」。(　) 内に記す。
取立否定　五段動詞は「書かない」の「～ワセン」由来の回答か,「行きはしない」の回答。後者は (　) 内に記す。
連用　「～始める」または「～出す」「～出した」
(欠)　該当項目なし

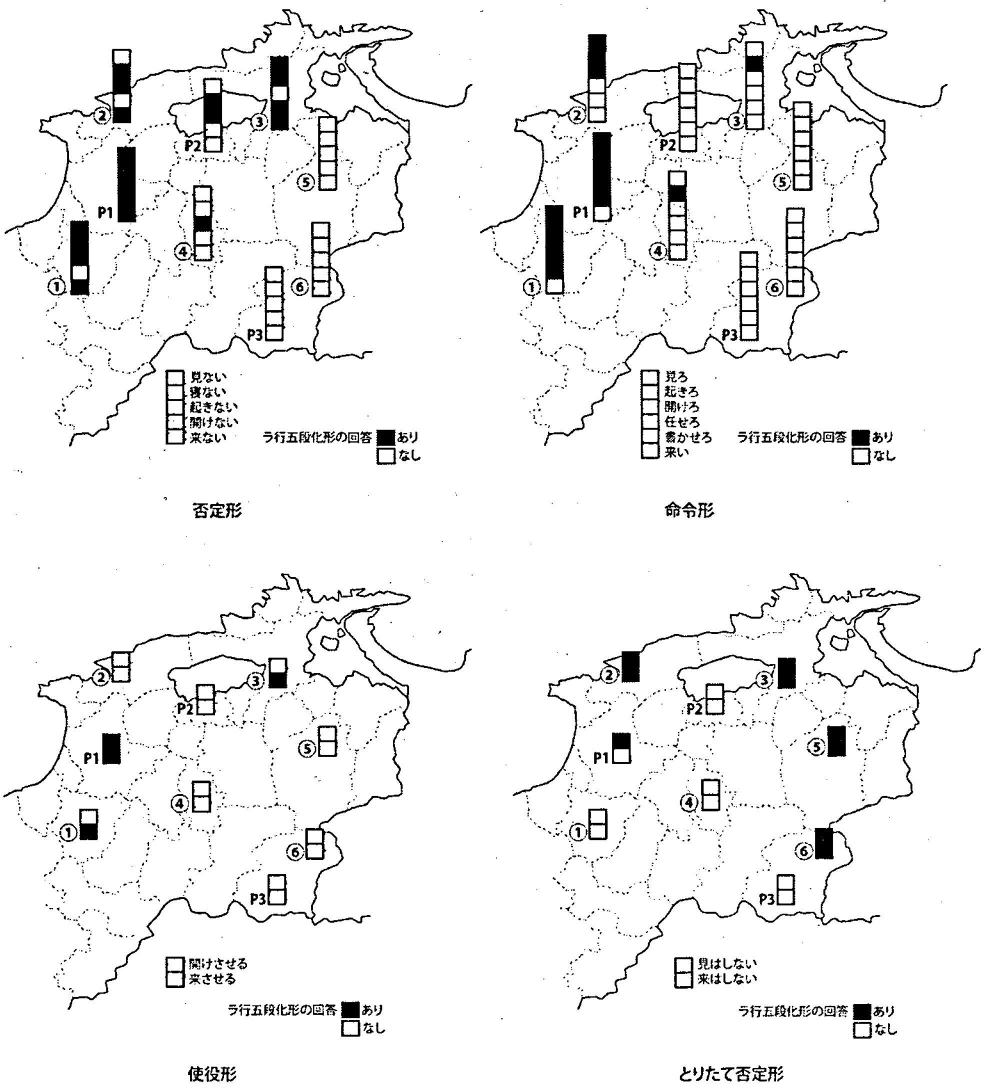
表1は,準備調査3地点の結果から,「書く」「死ぬ」「見る」「来る」「する」の活用形項目の回

答を整理したものである。共通語同様，終止形（P2 のみ）・仮定形・受身形では，もともと五段［-V…］：一段［-rV…］という対応があるものとし，その他の活用形で同じ対応則が成立する場合，その一段動詞および「来る」の形を「ラ行五段化形」とみなし，ゴシック体とした（以下の図表も同様)。出雲市［P1］では，「見る」の否定・使役・命令・とりたて否定形，「来る」の否定・使役形にラ行五段化形がある。この話者は，否定形・命令形のラ行五段化形を「若い人が使う」「新しい」とコメントしている。ただし，使役形は逆で，ラ行五段化形が「老人に多」「古」，一段形が「若い人に多」「新」とする。また，この表にはないが，宍道町［P2］では，次に見るとおり「寝る」「起きる」の否定形にラ行五段化形が現れる。なお，「見る」「来る」「する」の終止・連体形におけるミー等の形は，/ri，ru/拍における r 脱落という音韻現象による。後述するとおり，この現象はラ行五段化の成立に関わったと考えられる。

表 2 に，準備調査・本調査における，一段動詞・「来る」の否定形・命令形・使役形・とりたて否定形の回答語形を整理して示す。表 1 と同様にラ行五段化形をゴシック体とした。図 2 は，表 2 にもとづき，ラ行五段化形の有無に注目して地図化したものである。

表 2.　GAJ より命令形・否定形・使役形・とりたて否定形

		P1 出雲市	①佐田町	②平田市	③松江市	P2 宍道町	④木次町	⑤広瀬町	⑥横田町	P3 横田町
否定	見ない	ミン **ミラン**	ミン **ミラン**	ミン	ミン **ミラン**	ミン	ミン	ミン	ミン	ミン
	寝ない	ネン **ネラン**	ネン **ネラン**	ネラン	ネン **ネラン**	ネン **ネラン**	ネン	ネン	ネン	ネン
	起きない	オキン **オキラン**	オキン **オキラン**	オキン **オキラン**	オキン	オキン **オキラン**	オキナエ オキン **オキラン**	オキン	オキン	オキン
	開けない	アケン **アケラン**	アケン	アケン	アケン **アケラン**	アケン	アケン	アケン	アケン	アケン
	来ない	コン **コラン**	コン **コラン**	コン **コラン**	コン **コラン**	コン	コン	コン	コン	コン
命令	見ろ	ミー **ミレ**	ミー **ミレ**	ミー **ミレ**	ミーダガ	ミー	ミー	ミー	ミー ミーヤ	ミー
	起きろ	オキー **オキレ**	オキー **オキレ**	オキー オキーヤ **オキレ**	オキー オキーダガ **オキレ**†	オキー	オキーヨ **オキレ**	オキー	オキー オキーヨ オキーヤ	オキー
	開けろ	アケー **アケレ**	アケー **アケレー**	アケー **アケレ**	アケー アケーダガ	アケー	アケー	アケー	アケー アケーヤ	アケー
	任せろ	マカシェー **マカシェレ**	マカシェー **マカシェレ**	マカシェー	マカシェー	マカセ	マカシェー	マカシェー	マカシェーヤ	マカシェ
	書かせろ	カカシェー **カカシェレ**	カカシェー **カカシェレ**	カカシェー	カカシェー	カカセ	カカシェー	カカシェー	カカシェー カカシェーヤ	カカセ
	来い	コエ	コエ	コエ	コエ クーダ クーダガ	コイ	コエ	コイ	コエヨ コエヤ	コエ
使役	開けさせる	アケサシェー **アケラシェー**	アケサシェー	アケサシェー	アケサシェー	アケサセー	アケサシェー	アケサシェー	アケサシェー	アケサセー アケサシャー
	来させる	コサシェー **コラシェー** キサシェー **キラシェー**	**コラシェー** **キラシェー**	コサシェー キサシェー	コサシェー **コラシェー** キサシェー	コサセー	キサシェー	キサシェル キサシェー	キサシェー	キサシェー キサシャー
取立否定	見はしない	ミャーシェン ミャシェン **ミリャーシェン** **ミラシェン**	ミャーシェン	ミーシェン **ミリャシェン** **ミラシェン**	ミーヒン **ミラシェン** **ミラヘン**	ミーシェン	ミャーシェン	**ミリャシェン**	ミャーシェン **ミリャーシェン**	ミャーシェン
	来はしない	キャーシェン キャシェン	キャーシェン	コーシェン **クリャシェン**	**クリャシェン** **クラシェン**	クーセン	キャーシェン	**クリャシェン**	キャーシェン **クリャーシェン**	キャーシェン



† 212 図「起きろ（きびしく）」の回答

図 2. GAJ における一段・カ変動詞のラ行五段化形

表 1・表 2 に示した項目以外にも否定形・命令形・使役形・とりたて否定形において，ラ行五段化形が，多くは一段形と併用して回答されている。例えば，準備調査の出雲市［P1］の回答で「貸す」命令形はカシェー・**カシェレ**，「貸す」の否定形・とりたて否定形はカシェン・カシャーシェン・**カシェリャシェン・カシェラシェン**[7]，「起きる」使役形はオキサシェー・**オキラシェー**である（いずれもゴシックがラ行五段化形）。また，本調査の 184 図「着ることができない（能力可能）」では，佐田町①，平田市②，木次町④において，一段形ヨーキンなどとともにヨー**キラン**というラ行五段化否定形が回答されている。また，同じ図の横田町⑥では，ヨーキンとともにヨー**キリャシェン**と

いう，とりたて否定のラ行五段化形が回答されている。

以上のGAJの結果から，次のことが言える。

(1) 出雲地方では，一段動詞の否定形・使役形・命令形・とりたて否定形において，一段形とラ行五段化形が併用されている。「来る」のラ行五段化形は，否定形・使役形・とりたて否定形に観察され，命令形には現れない。「する」のラ行五段化は確認できない。

(2) 否定形・命令形・使役形と，とりたて否定形とで，地理的分布が異なる。

(3) 否定形・命令形・使役形のラ行五段化には，おおよそ次の地域間序列が見られる。

P1・① ＞ ② ＞ P2・③ ＞ ④ ＞ ⑤・⑥・P3

すなわち，出雲北西部（出雲市周辺の宍道湖西部域）でラ行五段化傾向がもっとも強く，東部・南部ではその傾向が弱い。

(4) とりたて否定形のラ行五段化形は，上の序列に反し，東南部でも見られる。

上の(3)を通時的に解釈すると，否定・使役・命令形でのラ行五段化は，まず出雲市など宍道湖西部域で起こり，東部・南部に広がってきたと考えられる[8]。

一方，(4)のとりたて否定形については，GAJ161図「見はしない」，162図「来はしない」を見ると，京都府丹後半島から島根県出雲地方までの日本海側，および岡山県全域に連続して「ミリャセン」「ミリャーヘン」，「クリャセン」等のラ行五段化形が分布することが確認できる。とりたて否定形のラ行五段化については，他の活用形とは別の成立・伝播過程を考える必要がありそうだ。

後述のように，先行する広戸(1971)の出雲市方言の記述には，意志形でもラ行五段化した形があるが，GAJではどの地点も「ニョ（ー）」「ネヨー」（寝よう）などの一段形しか回答されていない。

また，出雲市［P1］では「する」の意志形に，サ行五段化形サが現れる（後述）。

3.2 その他の記述・調査データより

否定形等のラ行五段化が宍道湖西部域で先行しているという点は，GAJに前後する複数の記述を照らし合わせても，おおよそ矛盾しない。

出雲方言における一段動詞のラ行五段化を早い時期に指摘したのは，広戸(1971)である。広戸は，出雲・隠岐・石見・因幡の動詞活用体系を表に示し，「出雲では一段活用が五段化する傾向がある。特に青少年に多い」（p.311）と指摘した。この「出雲」とは出雲市であることが明記されている。広戸の表では，「起きる」「捨てる」の命令形として，オキー，スィテーとともに，オキレ，スィテレというラ行五段化形，同じく「推量意志形」としてがオキョ，スィチョとともに，オキラ，スィテラというラ行五段化形が記されている。意志形でのラ行五段化形はGAJでは確認できなかったものである。「起きる」「捨てる」「来る」の否定形はオキン，スィテンでラ行五段化形は記されていない。使役形やとりたて否定形の記述はない。また，「する」の「推量意志形」としてショとともにサというサ行五段形がある。

友定・他(2008)，有元・友定(2008)の出雲方言の概説にも，一段動詞の否定形・命令形・意志形，「来る」の否定形・命令形におけるラ行五段化および「する」のサ行五段化傾向についての記述がある。出雲のどの地域と限定した記述があるわけではないが，これらの書は，宍道湖西部域で得られたデータに大きく依拠しているようである[9]。

一方，加藤(1935)は，出雲中部に位置する大原郡の動詞活用体系を早い時期に記述している。この記述では，例えば「起きる」が，オキン（否定），オキョ（未来），オキテ（連用），オキマスィ（現

在)，オキーコト（連体)，オキ（命令）と活用するとされており，一段動詞や「来る」のラ行五段化，および「する」のサ行五段化にあたる形は記されていない。ほかに神部(1982)も出雲方言の動詞活用を概説している。地域の限定はなく，一段動詞のラ行五段化や「する」のサ行五段化に関わる記述・例文はみあたらない。

表 3 は，出雲北東部の松江市八束町（旧.八束郡八束町。中海に浮かぶ大根島・江島）で，筆者が 2009 年 8 月～2011 年 2 月に高年層を対象として行った臨地調査結果による[10]。インフォーマントは下のとおり。

A　昭和 11 年（1936 年）生まれ，男性。八束町入江で生育，現住所は八束町二子。
B　昭和 12 年（1937 年）生まれ，女性。八束町波入で生育，現住所も同じ。
C　昭和 7 年（1932 年）生まれ，女性。八束町江島で生育，現住所も同じ。
D　昭和 7 年（1932 年）生まれ，女性。八束町江島で生育，現住所も同じ。

表中，一段動詞・「来る」のラ行五段化と認められる形はゴシック体とした。使役形と否定形でのみラ行五段化形が使用語形として得られた。ただし，否定形では使用が稀だったり，インフォーマントによって判断が異なる。命令形のラ行五段化形は用いないと内省される。否定形・命令形のラ行五段化形は「若い人の言葉」「いい言葉」と意識されており，「寝る」の命令形に関する質問では「ネレということを，このあたりではネーと言う」というコメントも得られた。このコメントからは，ラ行五段化形をいわば〈標準〉形と捉える意識がうかがえるが，ここでの〈標準〉は，松江市街地のことばに置かれていると推測される。八束町高年層においてこのように一段動詞のラ行五段化が進んでいないという状態は，GAJ の分布と整合する。

表 3.　八束町（大根島・江島）の動詞活用

		基本	否定	使役	意志	命令	仮定	取立否定	過去
五段	書く	カク	カカン	カカシェー	カカ	カケ	カキャ	カケシェン カキシェン	カイタ
	蹴る	ケー	ケラン	ケラシェー	ケラ	ケレ	ケリャ ケラ	ケーヘン	ケッタ
ナ変	死ぬ	スィノー	スィナン	スィナシェー	スィノー	スィネ	スィニャ	スィネヘン	スィンダ
一段	寝る	ネー	ネン **ネラン**	ネサシェー ネラシェー	ニョー	ネー	ネリャ ネラ	ネーヘン	ネタ
	起きる	オキー	オキン	（未確認）	オキョ	オキ オキー	オキリャ	オキシェン	オキタ
カ変	来る	クー	コン **コラン**	キサシェー	コー	コイ	クリャ	クーシェン コーシェン	キタ
サ変	する	スィー	シェン	サシェー	ショー	シェー スィー	スィリャ	スィーシェン	スィタ

△ 判断がゆれる形や「使うとしても稀」と意識される形

「来る」否定形の広域・多年代の分布を知る資料として，都染(2008)の石見福光－松江－伯耆大山間グロットグラムがある。「来ない」のラ行五段化形コランは，高年層では松江近くの数地点で回答されている。北西部よりもむしろ松江市が優勢に見える。低中年層では出雲最東部の「安来」を除く「荒島」(安来市）から石見東部までコラン分布域が広がる[11]。「来なかった」は，全体的に「来

ない」よりラ行五段化形の回答が増える。高年層では女性に限りコランダッタ・コラダッタがある。低中年層では，コランダッタ・コランダ・コランカッタ等のラ行五段化形が，出雲東部の「荒島」（安来市）から石見の「湯里」（旧.温泉津町，現.大田市）に分布する。「来ない」も「来なかった」も，石見のラ行五段化形は，中年層女性に目立つ。

3.3. これまでの調査・研究から得られる知見と課題

以上，出雲方言域での一段動詞のラ行五段化に関して，これまで見てきたことを総合すると，次のことが指摘できる。

(1) 出雲地方では，一段動詞の否定形・使役形・命令形・意志形・とりたて否定形において，一段形とラ行五段化形が併用されている。「来る」のラ行五段化形は，否定形・使役形・とりたて否定形に観察される。

(2) 否定形・使役形・命令形・意志形と，とりたて否定形とでは，地理的分布が異なることから，別の成立過程・成立動機を想定する必要がある。

(3) 否定形・使役形・命令形・意志形のラ行五段化は，北西部（出雲市など宍道湖西部域）で先行しており，それが東部・南部および石見東部に伝播したと考えられる。

(4) 北西部でのラ行五段化は，否定形より命令形・意志形で先に起こったと考えられる。ただし意志形のラ行五段化形は，早い時期での記述（広戸 1971）と近年の記述（有元・友定 2008 等）で言及されながら GAJ には現れず，問題が残る。使役形と他の活用形の前後関係については十分なデータがない。

(5) 松江市では，命令形よりも否定形でのラ行五段化が進んでいる。「来る」否定形のラ行五段化は，松江市のほうが北西部より優勢と思えるデータもあり，松江市のラ行五段化は単純に北西部からの受容・伝播とは捉えきれない側面を持つ。

(6) とりたて否定形のラ行五段化は，東部・南部でも用いられており，地理的には鳥取や岡山と連続する。

(7) 「する」はラ行五段化ではなくサ行五段化している。この変化も出雲北西部で先行している。

4. 考察

4.1 出雲地方におけるラ行五段化成立の言語内的動機と類推変化過程

3.3 の(4)で述べたように，北西部でのラ行五段化は命令形と意志形で先行したと思われるが，このうち特に命令形の先行という点は，その言語内的動機から説明しやすい。出雲方言は，/ri, ru/拍において/r/が脱落するという音韻特徴を持ち，動詞基本形（終止・連体形）語尾-ルもこの現象により，表 1 や表 3 に記したように，ケー（蹴る），ミー（見る），アケー（開ける）などとなる[12]。一段動詞では，この現象によって，基本形と命令形がともに，ミー（見る・見ろ），アケー（開ける・開けろ）など，同音となる。この基本形と命令形の同音衝突を回避するために，命令形で五段形-レが成立したのだろう[13]。その過程を下に簡略化して示す。

		段階 0		段階 1	段階 2
ラ五「蹴る」	基本	keru	ーr 脱落→	kee	kee
	命令	kere		kere	kere

一段「見る」	基本	miru	－r 脱落→ mii		mii
	命令	mii	mii	－五段化→	mire

段階0はr脱落のない状態，段階1はr脱落後の同音衝突が生じている状態，段階2は同音衝突回避のためのラ行五段化後の状態である。この想定は，命令形での－レ形が規則的な一段動詞のみで起こり，「来る」「する」で起こらなかったこととも整合する。つまり，この2動詞では基本形でr脱落が起こっても命令形との同音衝突が起こらない。なお，命令形のラ行五段化が，終止形との同音衝突に動機づけられているという説は，九州西部方言に関して彦坂(2001)が述べている。

また，表1の出雲市［P1］を見ると，一段動詞のとりたて否定形は ｛ミャ（ー）/ミリャー/ミラ｝シェン であり，元の「連用形＋ワ」相当部分が，仮定形ミャー/ミリャ/ミラと同形である。とりたて否定形の一段形前部のミャーは，mi-wa の縮約形，仮定形のミリャは mi-reba の縮約形で広く他地域にも見られる形，P1 のミラはその直音形とみなすことができる。仮定形ミャーがどのように成立したものかは問題だが，仮にこれがとりたて否定形のラ行五段化に先行して存在していたなら，とりたて否定形のラ行五段化は，次のように，仮定形ミャーととりたて否定形ミャー-シェンとの対応からの類推により起こったと考えられる。

仮定：とりたて否定＝mja(a)：mja(a)-seN＝mirja(a)：X＝mira：Y

X＝mirja(a)-seN

Y＝mira-seN

表1の横田町［P3］は，とりたて否定形がミャーシェン，仮定形がミャーとミリャの併用であり，この類推変化が起こる前の状態を示すと言える。

4.2 発生と伝播の過程における地理的な問題

3.3 の(2)で述べたように，出雲地方のラ行五段化は，北西部で先行して起こり，周囲に伝播・受容されていったと思われる。このことは，一段動詞のラ行五段化について，全体としては「逆周圏論」的だが，各地のレベルでは「周圏論」的な解釈も必要とした小林(2004)の論と，おおむね整合する。つまり，出雲方言域における一段動詞のラ行五段化形の存在は，古い言語状態の残存でなく近年の新しい変化であり（全体としての「逆周圏論」的解釈），発生源となった出雲北西部から周辺地域に広がりつつある（各地のレベルでの「周圏論」的解釈）ということである。

ただし，出雲地方では，島根県の行政・経済の中心地である松江市ではなく，第2の都市である出雲市周辺においてラ行五段化が成立し，松江市を含む東部・南部に伝播するという過程を経たという点は特徴的である。この地でのラ行五段化成立の言語内的動機は，上述のように，基本形と命令形の同音衝突回避に求められるが，同音衝突が起こる原因となったr脱落は出雲方言域に広く認められるものであり，なぜ出雲のなかでもとりわけ出雲市周辺でこの変化が起こったのかという点は，説明しにくい。また，出雲市周辺から周囲に伝播したという点については，その伝播を支える心理的基盤としての「威信」が出雲市に認められるかという問題も残る[14]。ただ，ラ行五段化の先行地域とは別に松江市という行政・経済の中心地が存在することは，3.3(5)で述べた，変化が一様に進まないということと関わるように思われる。

5. 今後の課題

本稿では，出雲方言域における「一段動詞のラ行五段化」について，主に先行研究の記述や調査

データという2次資料を用いて分析・考察した。本稿で述べた知見を確認し，不明な点を明らかにするためには，何より出雲内の複数地点・多世代にわたる方言話者を対象とした臨地調査を行わねばならない。こうした調査を行った上で，改めて，小林(2004)の見出した全国的傾向との異同を整理し，松丸(2006)の提起する「変化の過程の問題」と「五段化発生の問題」について考察する必要がある。

注

1 「連用形＋ワ＋セン」由来の形。図表では，「取立否定」と表記することがある。

2 ラ行五段化の発生の動機，および，途中段階での変化推進の動機は，五段動詞と一段動詞の活用の対応の単純化にあると考えればよく，必ずしも，「切る」「走る」等ラ行五段動詞そのものへの類推変化が起こったとみなす必要はないと筆者は考える。「一段動詞のラ行五段化」という呼び方は，変化の最終状態を名づけに用いたとみなせば，適切な名称である。一段動詞のラ行五段化を，五段（子音語幹）[-V…]：一段（母音語幹[-rV…]という対応則の拡張とみなす考えは，特に de Chene(1985)や陣内(1996:91-97)の論を参考にしている。

3 この表では，可能形を省略した。ミレルなどのいわゆるラ抜き形は，五段動詞に書ケルなどのいわゆる可能動詞形が成立した結果，五段-eru：一段-rareru という不均衡な対応が生じ，それを，-eru：-reru という対応に改めたものである。これもラ行五段化に該当する（Matsuda1993 参照)。

4 迫野(1998)や彦坂(2001)が詳述するように，九州では，上一・上二段動詞が五段化する一方，下二段動詞は保持される傾向がある。［古典語］→［現代標準（共通）語］→［ラ行五段化が進んだ現代諸方言］，という単一の変化軸で捉えきれるわけではない。ラ行五段化に限らず，動詞活用体系の地理的変異を，通時的に捉えようとする総合的な研究として，大西(1995)や小林(2004：第3部第4章)の論がある。また，中山(1993)の「動詞活用語形における成層性」という概念は，動詞活用体系の単純化の流れを捉える上で有効だと思われるが，本稿にはこの意義を詳述する紙幅の余裕がない。稿を改めたい。

5 ラ行五段化が比較的進んでいる九州方言を対象とした研究には，前注でも触れた陣内(1996:91-97)，迫野(1998)，彦坂(2001)などの蓄積がある。ほか，高知県幡多方言を対象に語彙的拡散過程を論じた松丸(2001)の論がある。

6 GAJ 準備調査の結果は国立国語研究所で保管されている未公開のカードに拠る。国立国語研究所(1979, 1981-83）の地図も参考にしている。本調査のデータは GAJ の本図・解説のほか，国立国語研究所のウェブサイト「方言研究の部屋」http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/で公開されている電子データを参照した。回答は表音的カタカナ表記に改めた。母音イ・ウ中舌化，母音エの狭母音化など音声レベルの変異を捨象したり，また動詞活用形に付く終助詞を除いたりした場合がある。

7 この方言では「貸す」相当動詞として一段活用のカシェルがあり，それがラ行五段化していると見られる。

8 島根県石見地方の GAJ の回答では，否定形・使役形でのラ行五段化形がわずかな地点に散見され，命令形のラ行五段化形は確認できない。このことから，一段動詞のラ行五段化が石見地方から伝播したものとは考えられない。隠岐では，本調査3地点のうち，島後南部の西郷町において，否定形・命令形にラ行五段化形が混じる。後述の広戸(1971)の記述と照らし合わせると出雲から伝播したものと考えられるが，この地点では命令形にミロ（見ろ）など，出雲にはないーロ形もあり，本稿ではひとまず隠岐を別に考える。

9 有元・友定(2008)の書は「宍道・出雲弁保存会」の協力のもとに成っている（p.126「おわりに」参照)。また，この編著者らはこの書の刊行に先だって宍道町（現.松江市)・斐川町・平田市（以上現.出雲市）で構成される湖西振興機構発行の『出雲のことば CD-ROM/DVD』にも携わっている。こうした編纂の経緯，および，その記述が主に宍道湖西部域での調査・観察データに依拠していることについては，編著者らから口頭で教示を得た。なお，上掲の CD-ROM の文例には，デラダッタ・デランダッタ・デランカッタ（出なかった)，サンダッタ・サンカッタ（しなかった）など一段動詞と「する」の否定過去形におけるラ行・サ行五段形も認められる。

10 この方言における動詞活用上の特徴で，本稿の趣旨からは外れるものをここに記しておく。まず，命令形は，表3に記した形単独よりも「カケハヤ」「カケヤイ」のように，終助詞ハヤやヤイを付した形での回答が多かった。「カクダ」など「基本形＋ダ」命令表現が回答されることもあったが表には反映していない。意志形（勧誘表現も含む）でも，単独形より「カカイネ」「カカイヤ」「アキョーカナ」のように終助詞イネ・イヤ・カナ等を付けた回答が多い。また，表3でとりたて否定形とした形は，「書かない」「寝ない」などの単純否定

形を問う質問でしばしば回答されることがあり，日高(2007)や金山(2011)のいう「とりたて否定形の単純否定化」が進みつつあるように思えた。さらに，次のような例文から，否定疑問文でのとりたて否定形の用法が，共通語より広いことがうかがえる。西日本方言域におけるとりたて否定疑問形の用法の広さについては高木(2011)が指摘している。

・ソロソロ ｛ゴザッシャーヘンカネ/ゴザッシャーシェンダラカナ｝。
（そろそろいらっしゃるのではないか/いらっしゃるのではないだろうか）

・イマゴロ コノ バングミ ｛ミテゴザッシャラヘンダラカネ/ミチョーシェンダラカネ｝。
（今頃この番組を見てい（らっしゃ）るのではないだろうか）

・モヨーガ ワルイケー アメガ ｛フーシェンダラカ/フーシェンダーカ｝。
（空模様が悪いから，雨が降るのではないだろうか）

11 伯耆大山の女性全年層にもコランが用いられているが，出雲方言から伝播・受容したものか，不明。松江－鳥取間グロットグラム（都染 2004）では伯耆大山より東にコランは現れない。

12 GAJ 61 図「起きる」，69 図「来る」などでも確かめられる。ただし，表 1 の P3 から分かるように，東南部では，mjaa，kwaa などの拗長音形への変化も起きている。

13 広戸(1971:292)や神部(1983:218)は，/re/拍の r 脱落は「コーガ（これが）」「ダーダ（誰だ）」など代名詞で起こるとしており，語彙的制限が強いようである。加藤(1935)の記述，GAJ 第 89 図，および表 3 に示した八束町の調査結果でも，ラ行五段動詞「蹴る」の命令形は r 脱落が起こらずケレである。

14 安来市出身の 20 代前半の女性によると，松江市が出雲市より経済・文化的に優位だという意識はなく，両市をほぼ同等に捉えているという。この意識を出雲方言話者が共有しているなら，出雲市周辺から松江市への方言伝播は十分に起こり得る。また，岩城裕之氏によると「宍道湖西部域は出雲弁の本場」という意識がその地の住民にうかがえるという（口頭での教示)。これは，宍道湖西部域が出雲地方のいわば「言語リーダー」である可能性を示唆するものである。

引用文献

有元光彦・友定賢治(編)(2008)『出雲弁検定教科書』ワン・ライン

大西拓一郎(1996)「活用の類と統合—全国方言の活用の通時的対応のモデル—」言語学林 1995-1996 編集委員会（編）『言語学林 1995-1996』三省堂

加藤義成(1935)「中央出雲方言語法考」『方言』5 巻 4 号

金山大介(2011)「単純否定・とりたて否定の対立に関する方言間対照」『第 92 回日本方言研究会発表原稿集』

神部宏泰(1983)「島根県の方言」飯豊毅一・他(編)『講座方言学 8 中国・四国地方の方言』国書刊行会

国立国語研究所(1979)『方言法の全国的調査研究—準備調査の結果による分布の概観』(科学研究費補助金研究成果報告書)

国立国語研究所(1981-83)『方言文法資料図集(1)』『同(2)』『同(3)』

国立国語研究所(1991)『方言文法全国地図 第 2 集』大蔵省印刷局

国立国語研究所(1993)『方言文法全国地図 第 3 集』大蔵省印刷局

国立国語研究所(1999)『方言文法全国地図 第 4 集』大蔵省印刷局

国立国語研究所(2002)『方言文法全国地図 第 5 集』財務省印刷局

小林 隆(2004)『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房

迫野虔徳(1998)「九州方言の動詞の活用」『語文研究』85 号

陣内正敬(1996)『北部九州における方言新語研究』九州大学出版会

高木千恵(2011)「諸方言における取り立て否定形式の意味用法について」(広島方言研究会発表資料，

2011.3.5)
都染直也(編)(2004)『JR 山陰本線松江－鳥取間グロットグラム集』甲南大学方言研究会
都染直也(編)(2008)『JR 山陰本線石見福光－松江－伯耆大山間グロットグラム集』甲南大学方言研究会
中山昌久(1993)「動詞活用語形における成層性など—中山の方式への解説」「同（つづき）」『国文学解釈と鑑賞』58 巻 1 号，7 号
彦坂佳宣(2001)「九州における活用型統合の模様とその経緯―『方言文法全国地図』九州地域の解釈―」『日本語科学』9
日高水穂(2007)「文法化理論から見る『方言文法全国地図』―「とりたて否定形」の地理的分布をめぐって―」『日本語学』26 巻 11 号
友定賢治・他(編著)・平山輝男（編者代表）(2008)『島根県のことば』明治書院
広戸惇(1971)「方言の実態と共通語化の問題点 8 鳥取・島根」東条操（監修）『方言学講座 第三巻 西部方言』東京堂
松丸真大(2001)「ラ行五段化の語彙的拡散―高知県幡多方言の 3 体系比較から―」『地域言語』13 号
松丸真大(2006)「見ない，見ろ」『月刊言語』35 巻 12 号
de Chene, Brent (1985) *r*-epenthesis and the Japanese verb. *Papers in Japanese Linguistics*, 10.
Matsuda, Kenjirô (1993) Dissecting analogical leveling quantitatively: The case of the innovative potential suffix in Tokyô Japanese. *Language Variation and Change*, 5.

付記
本稿は文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号 21520477（代表：灰谷謙二），および基盤研究(B)課題番号 21320086（代表：日高水穂）による研究成果の一部である。本稿の内容に関しては灰谷氏を代表とする共同研究のメンバーからさまざまな教示を得た。また，『方言文法全国地図』準備調査のカード利用については，国立国語研究所より許可をいただくとともに，閲覧に際してさまざまなご配慮を賜った。松江市八束町での調査では，八束公民館のご協力を得，住民のかたがたにご教示いただいた。以上の関係機関・諸氏に御礼申し上げる。

（広島大学）